森と人とアート
国際芸術センター青森 20周年

① 羽ばたく若手作家たち

次のステップへ後押し

「美術館とは違って、ＡＣＡＣは作家が滞在制作していろんなことを考える場所。ふらっと見に来た人もいろんな経験ができる」

２０２０年に日産アートアワードでグランプリを受賞し、弘前れんが倉庫美術館の展示でも注目された美術家の潘逸舟さんは、高校時代に国際芸術センター青森（ＡＣＡＣ）に通って影響を受けたことが、現代美術の道に進むきっかけになったという。

中国・上海出身で、弘前市で暮らしながら青森山田高校に通っていた潘さん。1年生だった04年にＡＣＡＣで開かれたユーゴスラビア出身の世界的なパフォーマンスアーティスト、マリーナ・アブラモビッチさんの講演を聞き「自分もこういう表現をしてみたい」と刺激を受けた。初代館長でパフォーマンスアーティストの故浜田剛爾さん（青森市出身）の存在も大きかった。「こういう人が一人青森にいるというだけで、自分も違う世界に行けるような気がした。現代美術を考えている時間が一つの居場所のようになった」という。

当時青森市古川にあった「空間実験室」などで2年生から作品を発表し始め、東京芸大に現役合格。アーティスト活動を始めた潘さんは17年、ＡＣＡＣの公募アーティスト・イン・レジデンスに選ばれ、滞在制作に取り組んだ。「浜田さんが生きていたら作品を見てほしかった」と話す。

ＡＣＡＣではこれまで、公募や指名を含む251組の作家を滞在制作などに招いた。潘さん以外にも多くの作家が現在、国内外のアートシーンで活躍しており、ＡＣＡＣは若手の登竜門的な位置づけになっている。

近年十和田市現代美術館で展示やパフォーマンスをした中崎透さん、毛利悠子さん、津田道子さん、野村誠さん、松原慈さんや、弘前れんが倉庫美術館で展示した藤井光さんらもＡＣＡＣの経験者だ。

村上綾学芸員は「青森での創作活動を複数の館が支援している形にも思えて、面白い現象だと思う。県内だけでも一人のアーティストの成長を見ることができるスペシャルな状況」と語る。

海外の作家は、元々国際的な活動をしている人も多いが、ＡＣＡＣの経験を機に日本での発表機会を広げている人も。15年に滞在制作したサンドラ・シントさんは現在ブラジルを代表するアーティストになり、20年に東京・銀座のメゾンエルメスで個展を開いた。サンドラさんは「ＡＣＡＣでは多くの発見があった。中でも藍染めを地域の女性たちに教えてもらったことが今に生きていて、自分の作品に変化をもたらしている」と振り返った。

元学芸員の近藤由紀さん（現・トーキョーアーツアンドスペースプログラムディレクター）は「ＡＣＡＣは作家が次のステップに向かう中間支援施設。制作に学芸員が入り込み、作家がいかに次のステップにいくかが評価されるが、多くの作家が有名になっている」とこれまでの成果を語る。

作家にとってのＡＣＡＣの環境について、十和田市現代美術館の鷲田めるろ館長は「滞在制作費や交通費など金銭面のサポートも充実しており、作家は制作に集中して取り組める。滞在制作で新しい作品が生まれ、青森という場の良さが取り入れられることは意味のあること。活動を継続してほしい」と話した。

（大友麻紗子）

◇

青森公立大学国際芸術センター青森（ＡＣＡＣ）が開館20周年を迎えた。県内美術施設の5館連携プロジェクトが進められる中、「アート県青森」の一施設としても全国から注目を集めている。アーティスト・イン・レジデンスを中心とした20年間の活動を振り返り、今後の展望を探る。

※ＡＣＡＣは28日まで休館中。この連載は6回の予定です。

ＡＣＡＣで滞在制作した潘逸舟さん㊧の作品「揺れる垂直」の制作中の様子。市民と一緒に挙手して自然に揺れる腕の映像を撮影。風で揺れる木々の映像と対比させた＝2017年、ＡＣＡＣ提供